

物故会員

與謝野 晶子

よさの あきこ 歌人 1878 ~ 1942。大阪府堺市生まれ。
作歌は『乱れ髪』(明治三十四年=1901)以降、五万首をこえる。
掲載作は、明治四十四年(1911)九月一日、雑誌「青鞜」創刊号の巻頭を飾った晶子異色の述懐詩である。

そぞろごと

山の動く日来(きた)る。
かく云へども人われを信ぜじ。
山は姑(しばら)く眠りしのみ。
その昔に於て
山は皆火に燃えて動きしものを。
されど、そは信ぜずともよし。
人よ、ああ、唯これを信ぜよ。
すべて眠りし女(をなご)今ぞ目覚めて動くなる。

一人称にてのみ物書かばや。
われは女(をなご)ぞ。
一人称にてのみ物書かばや。
われは。われは。

額(ひたひ)にも肩にも
わが髪ぞほつるる。
しをたれて湯瀧(ゆだき)に打たるるころもち。

ほとつくため息は火の如く且つ狂ほし。
かかること知らぬ男。
われを褒め、やがてまた譏(そし)るらん。

われは愛(め)づ。新しき薄手(うすで)の玻璃(はり)の鉢を。
水もこれに湛ふれば涙と流れ。
花もこれに投げ入(い)るれば火とぞ燃ゆる。
愁ふるは、若(も)し粗忽なる男の手に碎け去らば。
素焼の土器(どき)より更に脆く、かよわく。

青く、且つ白く、
剃刀の刃のころよきかな。
暑き草いきれにきりぎりす啼き、
ハモニカを近所の下宿に吹くは懶(ものう)けれども。
わが油じみし櫛笥(くしげ)の底をかき探れば、
陸奥紙(みちのくがみ)に包まれし細身(ほそみ)の剃刀こそ出づるなれ。

にがきか、からきか、煙草の味は。
煙草の味は云ひがたし。
甘(あま)しと云はば、かの粗忽者(そこつもの)
砂糖の如く甘しとや思はん。
われは近頃煙草を喫(の)み習へど、
喫むことを人に秘めぬ。
蔭口に男に似ると云はるるもよし。
唯おそる。かの粗忽者こそいと多(さは)なれ。

「鞭を忘るな」と
ツアラツストラは云ひけり。
女こそ牛なれ、また羊なれ。

付け足して我は云はまし。

「野に放てよ。」

わが祖母の母はわが知らぬ人なれど、
すべてに華奢(くわしや)を好みしとよ。
水晶の珠数(じゆず)にも倦(あ)き、珊瑚の珠数にも倦き、
この青玉(せいぎよく)の珠数を爪繰(つまぐ)りしとよ。
我はこの青玉(せいぎよく)の珠数を解(ほぐ)して、
貧しさに与ふべき玩具(おもちゃ)なきまま、
一つ一つ児等(こら)の手に置くなり。

わが歌の短ければ、
言葉を省(はぶ)くと人おもへり。
わが歌に省くべきもの無かりき。
また何を付け足さん。
わが心は魚ならねば鰓(えら)を有(も)たず、
ただ一息(ひといき)にこそ歌ふなれ。

すいつちよよ、すいつちよよ。
初秋(はつあき)の小(ちひさ)き篋(ひちりき)を吹くすいつちよよ。
蚊帳(かや)にとまれるすいつちよよ。
汝(な)が声に青き蚊帳(かや)は更に青し。
すいつちよよ、なぜに声をば途切(とぎら)すぞ。
初秋(はつあき)の夜の蚊帳(かや)は水銀(みづがね)の如く冷(つめた)きを。
すいつちよよ すいつちよ。

油蟬のじじ、じじと啼くは、
アルポオス石鱈(しやぼん)の泡なり、
慳貪(けんどん)なる男の方形に開(ひら)く大口(おほぐち)なり、

手握(てづか)みの二銭銅貨なり、
近頃の藝術の批評なり、
誇りかに語るかの若き人等の恋なり。

夏の夜のどしや降(ぶり)の雨、
わが家は泥田(どろた)の底となるらん。
柱みな草の如く撓(たわ)み、
そを伝(つた)ふ雨漏(あまもり)の水は蛇の如(ごと)し。
寝汗(ねあせ)の香、かなしさよ。よわき子の齒ぎしり。
青き蚊帳は蛙(かへる)の喉(のど)の如く脹(ふく)れ、
肩なる髪は鹿子菜(ひるむしろ)の如く戦(そよ)ぐ。
この中(なか)に青白きわが顔こそ
芥(あくた)に流れて寄れる月見草なれ。